

高商英語教育の象徴 「コレポン」

戦前の旧制高校と高商が、おしなべて外国語教育を重視したことはよく知られています。ただ、旧制高校での外国語教育は教養科目としての意味合いが強かったのに対し、高商は実用外国語教育に重きを置きました。(とはいえ、生之助ら優秀な講師陣を擁する小樽高商は、教養英語教育の分野でも高い評価を得ておりました。)その意味で、最も高商らしい外国語科目は、「商業英語」であったといえましょう。「商業英語」とは、読んで字のごとく、商業に関する英語一般を指します。なかでも新規取引の打診やサンプル請求に始まり、注文や苦情申し立てにいたるまで、貿易の際の通信(Correspondence)に用いられる英語は「コレポン」と呼ばれ、商業英語教育の中核となっておりました。そしてこの分野における日本のひとつのメッカが小樽高商であったことは、衆目の一致するところです。

小樽高商コレポン教育の伝統は、生之助を見出した第3代校長苦米地英俊によって築かれました。彼が大正6年(1917年)に上梓した「商業英語通信規範」は、英語による商業通信文を体

系的に網羅した教則本で、この種の著作としては我が国初めてのものでしたが、既に決定版とも呼びうる体裁を整えておりました。適宜練習問題も交えたこの教科書は学習者の圧倒的な支持を得、改訂を重ねた結果、最終的には700ページを優に超える大著となり、半世紀近くも刊行され続けるロングセラーとなったのです。この教科書を用いた苦米地の授業は峻厳そのもので、毎回相当量の商業文暗唱や宿題が学生に課され、学生の作文は如何に周到に準備されたものでも、原型が分からなくなるほどに訂正されたといえます。この時期、他の高商でも商業英語は講義されていましたが、小樽高商ほど徹底的なコレポン教育が行われていた形跡は見当たりません。「コレポン」は小樽高商卒業生のひとつの合言葉ともなり、実際の商取引でもその成果は遺憾なく発揮されました。「英語に強い小樽高商」の根幹は、まさしくコレポンにあったといえましょう。

苦米地の退官後、「商業英語」は彼の弟子である大谷敏治(後に東京外語大教授)と木曾栄作に受け継がれます。そしてその後も「商業英語」は他の外国語科目とは一線を画した商業学科専門科目として平成6年まで存続した後、英語総合教育化の中、約80年の歴史を閉じました。同年には奇しくも「商品学」(本誌12号参照)がカリキュラムから姿を消しておりますが、この「商品学」と「コレポン」こそ、戦前の小樽高商における実学教育を象徴し、学生達に最も強烈な印象を残した2教科であったといえるのではないのでしょうか。



苦米地英俊(1884 - 1966)
東京外国語学校(現東京外国語大学)在学時に講道館に入門。嘉納治五郎に師事する。小樽高商に赴任してからは小樽随一の柔道家としての名も高め、学生寮の寮監を務める傍ら街で柔道も講じた。また、日本に最初にスキーを伝えたと言われるオーストリア軍人レルヒ少佐から直接スキーの教えを受け、1912年2月21日(旭川第7師団で北海道初のスキー講習が行われたとされる翌日)小樽高商においてスキー講習会を開いた。校長を任期途中で辞職し、戦後初の総選挙に出馬、当選する(1946)。その後参議院議員も務めた。札幌短期大学(現札幌学院大学)及び北海道自動車短期大学初代学長。講道館理事。柔道8段。



木曾栄作(1905 - 1984)
小樽高商卒。恩師である苦米地の商業英語を引き継ぐ一方、同僚の岩田一男同様受験英語指導においても才能を発揮し、代々木ゼミナール黎明期を支える有名講師のひとつとなった。(当時、現職大学教官が受験指導に携わることとは別段珍しいことではなかった。生之助もラジオ受験講座を担当した時期がある。)学生や受験生たちからは、「基礎英作の木曾栄作」(逆も可)と呼ばれ親しまれた。小樽商大退官後、小樽女子短期大学(現小樽短期大学)初代学長を務める。

「商業英語通信規範
(最新補遺版：1932)」